平安貴族と、オレ

正記貞信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
平安貴族と、オレ

【Ｎコード】
Ｎ４０８３Ｃ

【作者名】
正記貞信

【あらすじ】
歴史を勉強する大学生と、史料の奥にいる「彼」との不思議な日常。

其の一（前書き）

もとは短編の予定でしたが、数が増えてきたため、連載という形にしました。
といっても、一話１０００字程度の、読み切りの集積です。

其の一

夜が来る。お日様ともお別れだ。

嫌な時間だ。ふっと、伸びをして、頭をかきむしる。まったく。コンビニ袋片手に、大学へと戻る。中身は、いつもの冷し中華。いい加減飽きた味だが、大きな失敗もない、無難な味だ。

「よっ、と。」

いつものように、一段飛ばしで非常階段を駆け上がり、研究室に戻る。運動不足が気になる身には少し辛いが、この階段を使うと近い。

「今日も、変わらんよなあ。いつもより、少し涼しいくらいか。なんか良いことでもないかな」

一人呟く。

開いた窓からは、風が吹込んでいて、蒸し暑かった昨日よりは、涼しい。

「平安時代の貴族」といったタイトルのプリントが、バタバタと音をたてるが、気にしない。

昔々、平安時代くらいの貴族って、羨ましい。なんか、楽で暇そうだから。歌さえ読んでりゃよさそう。

今の俺みたいに、なんとなく、努力もしないクセに、「いいことないかな」って言ってた貴族はいただろうな。

―ええ、いましたよ。もっとも、そんな人は誰にも相手されませんでしたけどね。私は、弓だって、結構上手いんですよ？―

…ん？声が聞こえる。

いや、声として
「聞こえる」のではなく、
「感じる」とでもいうのか。

こないだ授業でもらったプリントにあった、貴族の姿が、ふと気になった。
相変わらずバタバタ音を立てるプリントを取り上げて、絵巻のページを覗き込む。
そこには、見るからに弱そうな、文官の姿が描かれている。文官の癖に、いっちょ前に弓なんか持ってやがる。

前にみた時は、
「絶対使えないだろ」とニヤニヤしながら思っていたが、今は心なしか、以前よりも、
「お飾り」では無いように思えた。

―そんなに、私、弱くないんですよ？―
また聞えたよ。俺も疲れてんなあ。手早く冷し中華をたべたあと、天井を見やった時、そんな声が聞えた。

気分転換に、手の親指と人差し指の間のツボと、頭のマッサージをする。効果はまあ、ボチボチだ。

さーて、再開、再開、と。

いつの間にか、涼しい風はやんでいて、少し汗ばみそうな空気になっている。
団扇片手に仰ぎつつ、レポートに取組む。

「俺だって、少しは頑張ってるっつーの。平安時代の”これから”については、お前よりは、物知りだと思うぜ。」

意味もなく、絵巻の中の文官に、語りかける。

その時だけは、いつもは温和な顔つきの文官が、不機嫌な顔をしていたような気がした。

其の一（後書き）

<参考文献>

『国史大辞典』吉川弘文館
『日本国語大辞典』小学館
『日本史辞典』角川書店
『日本通史』岩波書店
『日本歴史』岩波書店
吉村武彦『古代史の基礎知識』角川選書
ほか

其の二

グダクダな研究室。勉強してる奴、本読んでる、飯食ってる奴、寝てる奴。
研究室とはいっても、学生の溜り場みたいなもの。テーブルの隅には、カップ麺の空容器が転がっている。

「少しくらい、片付けろってーの」
手近な所を片付けて、自分のスペースは確保する。

俺は今、貴族の日記を読んでいる。
なかなか、細かく記録していて、面白い。

『今日は、阿弥陀修正会だった』
そんな記述が出て来る。
もちろん、もとは漢文。

ああ、法成寺か。まったく、運営の記録を残すのも、大変だよな。
なんてことを思いつつ、この日記を残した貴族の、人格について、想いを馳せる。
「どんな人間だったんだろうな。これだけじゃ、ちっともわからない。」

―私だって、好きで好んでそんな事、儀式や行事の事ばかり書いてるわけじゃありません。もっと、自分の事だって書きたかった―

ふと、そんな声が聞こえた気がした。
辺りを見回して、ふむふむ、と読み返す。

―残したくても、残せなかったんです。自分のことを書けるほど、偉くは無いし、必要とされていませんし―

「残らないてのも、寂しいもんだな。俺が、その文字には残らない、お前の姿を探し出してみせるよ」

俺はそう、本に語りかける。

自分が知らなかった、自分とは思えない程優しい声をしていた。

それに少し驚く。

「とはいえ、取り掛かるのは、明日からな。今日はもう寝る」

―落ち着いてるんだか、怠け者なんだか。…でも、待ってますよ。

すぐにできるとは、期待はしてませんけどね―

ウトウトとする中、ため息混じりの声と、優しい気持ちが、俺の中に流れてきた気がした。

其の三

本日快晴。風無し、お金無し、湿度有り。
まもなく正午。
日差しは、時間と共に強くなる。

「いつものことだが…暑い。」
団扇変わりに、プリントの束で扇ぐ。
「地球温暖化、てやつかい？まったく。昔は過ごしやすかっただろうな。」
半袖のシャツに、汗が滲む。
研究室で夜を明し、牛丼屋で、遅い朝食を採ってきた所だ。

戻ってすぐに、窓を全開にする。
開け放った窓からは、風の代りに、セミの声が聞こえる。

「先生は当然のように、言うけど、俺には京の配置とか、わかんねーっての。」

レポートについて質問にいった時、さも「常識」といった顔で、京における貴族の邸宅の配置について、あれこれ言われた。
残念ながら俺には、さっぱりわからないため、自分で調べるしかない。

本棚の中段にある、大判の事典を引っ張りだし、目的のものをさがす。本棚は背が高いから、よく使うものは、中段に置いてある。
「平安京の図は、どれだったかな、と」ふんふんと、他のページに見とれつつ、暫くして、見つけた。

図は折り畳み式になっていて、広げてみる。

「字がちいせーよ」

老眼のように、思わず図を目から遠ざけとしまう。

細かな字で、一条とか二条とか、色々ある。

京の図では、よく言われる通り、碁盤の目のように道が整備されている。

よくもまあ、こんだけのものを造ったもんだ。

「摂関家の家はどこだっけ、か。…おお、あったあった。」

ごちゃついた文字の中から、その旨を記したものを見つけた。

地図を見て右側、左京には、道長・頼通等で摂関家の邸宅がある。

他にも、有力貴族の邸宅が並ぶ。

「こりゃすごい。さしずめ、永田町みたいなものか？詳しいことはよく知らんがね。」

―「ながたちょう」というものが、どういう所かわかりませんので、なんとも言えませんが…京の中心区画ですよ。御幸の際にも、この辺りの道を、よく通りますし―

「ふーん。」

この「声」にも、いい加減、慣れて来る。

いつか読んだ、貴族の日記やその他の記録を思い出す。

そこには、確かに「彼」に言われた通り、『二条を通った』という記述があった気がする。「お前、結構詳しいのな。」
素直に感心する俺。

―そうでしょう、そうでしょう。なんてったって私は…そりゃ、そんなに偉くはありませんでしたけど…―
明らかに、誇らしげな、嬉しそうな声で、
「彼」は続ける。

それから暫く、「彼」の話を聞いて、また、レポートに取組む。
なんて、真面目な大学生なんだろうと、少しだけ、偉ぶってみる。

少し、風が出てきた。これなら涼しく、快適に勉強できそうだ。
「んんっ」
大きく伸びをして、机に向う。
快調、快調。

―なんですか！私の話、殆ど聞流していたくせに！―
上機嫌だった「彼」は、不機嫌になっていた。

其の四

ジリリリリリ
なんだっけ、アブラゼミ？がうるさい。
家の中まで、響いてきやがる。

今日も、相変わらず蒸し暑い。
「今日も真夏日が続き…」
点けっ放しのテレビからは、そんなアナウンスが聞こえる。
今さら消しに戻るのも面倒だ。もういいや。

「フーッ、と。」
アパートのドアを開けたとたんに、熱気が纏わり付いてくる。
ため息の一つでも、つきたくなるってもんだ。せっかく、風呂に入ってスッキリしたっていうのにな。
ただ立っているだけでも、汗ばんでくる。

タオル片手に、日陰をたどりながら、いつもの牛丼屋を目指す。
原チャリが壊れているから、歩きなのはどうしようもない。

真夏日の昼の常として、陽は高く、風はぬるい。
歩みも遅くなるってもんだ。
この暑さ、もう勘弁してくれ。

胸ポケットにねじ込んだ、新書サイズの日本史の概説書を取り出して、団扇代わりにする。
本は、暑さもあいまって、ふにゃふにゃだ。
扇いだところで、、ちっとも涼しくなりやしない。気休め。

うだるような暑さとは、まさにこの事。

「そっちは、どんなんなんだ？」

少しでも気を紛わそうと、

「彼」に話を振ってみる。

…返事がない。

「おーい」

あれやこれと言葉をかけたり、暫く待ってみたりするが、

「彼」は黙ったまま。

居て欲しい時に限って、居やしない。ったく。

「冷し中華大盛りで！」冷房の効いた牛丼屋で、夏限定の冷し中華を頼む。

今日みたいな暑い日には、ホカホカの牛丼は遠慮しときたい。

ふにゃふにゃの概説書をポケットから取り出して、しおりを挟んで置いたページから、また読みはじめた。

「えーと、なになに、国風文化とはいうが、実際は唐の文化が…」

「そうですそうです！」

おや、今頃か。

「なんだかんだいって、皆さん唐土（もろこし）の物が大好きだったんですよ～」

「ほ～、なるほど。」

「彼」の声と、本の記述の整合性に、思わず感心する。一呼吸おいて、俺は続ける。

「んで、なんでさっき呼んだ時には出て来なかったんだ？」

「さっきって、いつです？私を呼びました？」

「この店に入る前だ。覚えてないのか？」

「ん～、全然覚えてませんね。暑さにやられちゃったんじゃないですか？くすくす」

そういって、
「彼」は、まるで子供のように笑う。
なにやら腹がたつが、どうやら呼んだ事を知らないのは、本当のようだ。
「あーもういいわ。忘れてくれ」
「なんですか～？気になっちゃうじゃないですか～、ねえねえ」
こいつ、こんな奴だったのか。
うっとうしいので、軽く流す。
「なんでもないから、もう黙ってろ」
「…人の事呼んどいて、すんすん」
泣く振りをしてやがる。どうやら拗ねてしまったようだ。
いい加減面倒臭くなったので、ほっとくことにした。
「すんすん…」
チラリ
「彼」の姿は見えないが、嘘泣きしつつ、こっちを見てる気配がする。
「すんすん…」
チラリ
無視、無視。
そうこうしているうちに、注文しておいた、冷し中華が来たので、本を閉じる。
とたんに、
「彼」の気配も、嘘泣きの声も消えてしまった。

「おーい」
怒らせてしまったかな。
いくら面倒臭かったとはいえ、ちょっとやりすぎたかな。
少し反省。
中学校の時にも、似た事をやってしまったのを思い出す。

「…ま、とりあえずは飯だ、飯。うんうん、夏はやっぱ冷し中華だな」
暑さで食欲の減退した体には、ちょうどいい。
ほどよいレモンの酸味が、また食欲をそそり、音をたてながら、すする。

美味さに魅了されてるとはいえ、お茶を飲む時など箸が止まった時には、やっぱり
「彼」のことが気になるわけで。
「急に消えちまって。なんか条件でもあるんかな？」
混雑してきた店内を見やりながら、考える。
店員さんが慌だしく、オーダーを取ったり、会計をしている。

「…おおっと、汁がこぼれちまう」
やっぱり、食事中に別の事を考えるのはよくないな。
…難しいことは棚上げにして、まずは、腹を満たす事にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4083c/

平安貴族と、オレ

2010年11月19日07時44分発行